

音楽教育思想の比較研究

北 村 恵 子

音楽教育は、いつの時代でも真剣に語られ考えられ実践されて来た。次代を担う子ども達にどのような音楽教育をしたら良いのか。

これは社会の要求や環境が時代と共に求めて来た一般教育内容の変化に従って少しずつ変って来たと思われる。

戦後から現在までの軌跡を振り返って見ると、音楽教育だけにとどまらず、その生活全体に大きな変化が見られた。

昭和20年8月15日敗戦を迎えたわが国は、それまでの政治体制、社会のしくみ、考え方をはじめ大幅な転換を要求され、それに添うことを余儀なくされた。

軍国主義、戦時体制から一転して民主主義国家となり、戦争を放棄した平和国家になったのであるが、人間の考え方は短期間に急に変えられるものではなく、各種の考え方の混乱が起った。考え方だけでなく、日々の暮らしにおいても、戦争で荒廃した国土と、衣食住の欠乏がもたらす人の精神的すさみが起った時代であった。

しかし、戦争が終ったことで、又新しい時代が来るという期待感もあり、多くの教育改革も行なわれ新教育体系が芽をふき、それが急速に根を下ろしつつあった。

新時代が来たというので途惑いはあったが、中でも教育関係者は、これからは今までのような軍国主義の考え方でなく、民主的で自由な発想の基に教育を考えられることで、少なからずの興奮も伴ない、必死になってそれに向かっていった。

こういう時代背景の基で発刊された一冊の雑誌「新音楽教育」創刊号にみる当時の音楽教育思想について、現代と比較考察してみたい。

昭和23年5月白眉社発行の「新音楽教育」第一巻は、編集者に当時の音楽教育関

係者の荒赴彦氏、酒田富治氏、瀬戸尊氏の3氏が当たっている。

創刊号としての特別寄稿に連合軍民間情報教育部のC・デーヴィズ氏の文も載せられている。又、各界寄稿特集で、音楽の専門家でない人々、即ち音楽に興味を持っているものの、自分は他の職業についている人、又は全くの門外漢の人達の文章が載っている。

これは、この時代の人々にとって音楽教育とはどうあらねばならぬかを、各々の立場で考えたことを率直に書き示されているので非常に興味深い。当時の識者の音楽観及び音楽教育観が理解出来る。このうち4人の文を基に考察していきたい。

まず「新音楽教育」発刊趣旨からみてみよう。要約すると次の様である。

「音楽はあらゆる科学、宗教、芸術を根とした文化の華であり、1国の音楽を観ればその国の文化水準が直ちにわかる。その意味に於て新しい音楽教育は日本再建、文化国家の一端を担うものとして大きな期待をかけられている。しかし、教育者の視野が狭いため社会とのつながりに欠ける点があった。

一般社会人と胸襟を開いて交ることをしなければ社会と共に成長は出来ない。

実社会と遊離した音楽教育は無意味である。従来のような上からの指示、教室万能の封建的教育から脱皮し、はっきりと責任を持つ民主的良心的教育に向かって転換しなければならぬ。それには教育者自らの教養(学術、技能)が必要であり、それをお互に出し合い良いものは育てていく努力と、学閥意識、階級観念、派閥根性の殻を切り捨て、一般の声もきき、科学、哲学、経済とも結びついて新工夫するために、だれでもが意見を出し合える開かれた音楽教育雑誌が必要である。」というものである。

これをみると、当時の教師像の一端が伺える。「それまでの長い間、教育者と言えば一般に視野が狭く、生きた社会の認識に乏しく、その考え方に弾力性がないとの批判を受け、一種異った社会人のような取扱いをされて来た感があり、教育者自身も“俗人、語るに足らず”と言った誤った感情に支配され、一般社会人と交ることを潔しとしない習慣の中に閉じこもっていたことも否定出来ない。」と書いており、これは現代の教師像にも心当たりが無い訳ではない。

しかし先の一文の時代背景と現代のそれとでは隔世の感がある。30余年程しかた

っていないというのに。

現代では社会との対話を重視し、音楽教育においても社会の中に溶け込んだ教師が多いと思われるが、教師の殻に閉じこもる人も中には居る。

しかし、だからと言って社会の風潮や意見が理解されていないとは言えない。現在のような巨大なマスコミ社会、情報化社会においては、むしろその氾濫から目や耳を覆うことの方が至難の技と言えなくもない。

この様に時代背景が異なるので一概に論ずることは出来ないが、しかしいずれにしても教師としての姿勢に、自分の殻に閉じこもることが良いとは思われず、種々様々な意見をきき、良いと思われるものは採択し育てあげることが、いつの世になっても大切なことは言うまでもない。そして社会の風潮にただむやみに流されることも慎みたいものであり、あくまでも主体性はあって欲しい。

昭和23年頃の音楽教師については、終戦後の民主的精神が急速に浸透するにつれて、前述のような風潮も漸次改められて来ていることは認められても、自ら進んで社会の中に飛び込んで直接生きた社会と共に息ずき、その中から自らの生きる道を学びとろうとする意欲は決して十分とはいえないであらう。

生きた実社会との遊離はあってはならぬことをここで方向づけているのだが、それから30余年を経た現在、音楽教育は実社会とどのような関係を持っているのだろうか。

現在、社会問題となっている住宅問題はじめ時間的に精神的に余裕のない日常は、騒音公害やその他多くの問題を投げかけている。

家庭内においてもマスコミの影響によって一方的に与えられる受身の音楽が氾濫し、音楽教育が好むと好まざるとにかかわらず受動的な立場でなされている。せめてもの救いは、それが自分の意志に反したものの場合はスイッチを切る事が出来るという、きわめて消極的な行動ではあるが、それが出来ることであらう。子ども達に与える影響については、コマーシャル・ソングからはじまって劇画、動画、漫画などの多さ、それに伴う無制限な音の刺激の多さなどについては真剣に語られねばならないだろう。

しかしマス・メディアを通しての刺激に対し子どもは悪影響も受けるが、そればかりとは言えないのである。彼らは大人よりも新鮮な感覚で現代の音楽をどんどん自分のものとしていく。日本が抱えている本当に多様な音楽を自然に受けとめていく感覚は、日本人、殊に子どもや若者の特性とも言えるだろう。

そして多様な音楽の中から、自分がどういう音楽に惹かれ、又どの様な音楽が自分にとって生きていく糧になっていくかの選択は自由に与えられている。とは言っても事実はそうとばかり言い切れないのではないか。

親に強制された音楽教育、学校教育で受ける音楽と自己の求める音楽とのズレに対する不信感など、だれでもが1度は考えたことがあると思われる矛盾があるからである。

現在の若者達は多大なマスコミ社会で育ち、種々の情報を得て生活している。この若者達は従来、学校音楽教育で受けた音楽には反発は感じて、自分から見つけた音楽、自分が欲している音楽を求めて様々な努力をしているし、又その入手がいつでも可能となる社会環境の中にいる。

「学校音楽、校門を出ず」の感は、多少変化が見えるとは言っても、それは現在でもまだ否めない。

子どもや若者はそれを欲しているにもかかわらず、音楽教師の方がその速いサイクルの回転テンポについてゆけず、従来の決まり切った型のくり返しをしている者も多いと思われる。

テンポの速いこの日本の現状において、教師のテンポが一昔前のままでは多くの要求に答えられるはずもなく、ここに教師の自己研鑽、社会とのつながりを又改めて言及せざるを得ない。

昭和23年頃に反省され方向づけられたことが現在に到っても同じことで反省点が浮上してくることは歯がゆいことではあるが事実である。昭和23年頃、社会とのつながりを重視した音楽をと説いていても、前述のように果して現在実社会を重視した音楽教育がされているかという点については、はなはだ疑問が多いのである。

この多様化する社会（音楽においても他においても）の中で音楽教育の根本を見通し、実社会とも深いつながりを持ち、幅広く豊かな人間性育成のための音楽教育

をしていくには、やはり学校音楽教育の見直しをし、根本から音楽教育についての研究をすることが必要であり、これを避けては通れないと思われる。

小学校や中学校などの音楽授業で感じられるのは、教養としての音楽、勉強としての音楽の要素が強く、それが実社会で好まれている音楽と一線を画している。又教材自体が今の若者には興味を持ちにくいものが多いのではないかという批判もある。しかし教育としての音楽には建前があり、文部省指導要領から逸脱したと思われる音楽を教える時、大きな覚悟がいる場合すらある。最近でもそうである。国歌である「君が代」をジャズ風にアレンジして演奏させた音楽教師がやめさせられるという事件もあった。

音楽教師としても、職場を離れた時、自分の好みの音楽を、それが演歌であろうとポップス系であろうと、楽しみとして身近に置く者もいる。自分の楽しみは楽しみ、学校で教える時は指導要領の域を出ないというのが本音と建前の使い分けであり、それが又音楽教師の悩みの種にもなっているのではないだろうか。

「今、学校でどんな歌、歌ってる？」

「文部省の教科書にのってる歌だよ」

「今、流行している歌は歌わないの？」

「流行歌やなんかは、学校では歌っちゃいけないんだよ」

「どうして？」

「歌ってもいいけど、本当は学校ではいけないんだよ」

「先生がそう言うの？」

「そんな事言う訳ないだろ」

「家ではいいの？」

「いいさ、決まってるじゃん」

「どうして学校でいけなくて家ではいいの？」

「知らない！」

以上、私と小学生との会話である。

子どもは、学校音楽とそうでない音楽があって、学校では歌ってはいけない音楽

があると、だれが教えた訳でもないのにそういう意識を持っている。これは驚くことに、もう幼稚園の子どもにきいてもそうなのである。

日本には実に多様な音楽が存在していることは度々書いて来た。

我国の古来よりの音楽（伝統的な）、外国から入って来た音楽など各種様々な音楽が各人の好みによって演奏されている。日本音楽は東洋的な美しさの魅力があるはずであるが、明治以降の西欧文明崇拜の社会の中では正当な評価が与えられず、置き去りにされていた感がする。自国の音楽であったものが音楽教育としてとりあげられていない国はめずらしい。自国の音楽をあまり低く評価していたのは残念であったが、最近では日本人が自分の中に持っている日本的なものへと目を向ける事が多くなって来た。

日本人であれば、短かい言葉にリズムをつけてとなえると、それがほとんど全ての人が同じ歌いまわしになる。

例えば、こーげろ　こーげろ　こー入道

焼ーけろ　焼ーけろ　やー入道

などとりズムをつけて言った場合、自然に出てくるイントネーションは、だいたい同じになる。それが日本人が持っている自然の音階であり、音楽のはじまりであると言える。

外国からの様々な音楽が身近に溢れるようになってはじめて自国の音楽の良さを見直すという状態が現状だと思われる。西欧の人々に日本音楽の美が理解されたりする場面も大変多い。日本の社会の中にも、日本音楽が正当な評価を得、教育の一端を担う日も近いのではないかと期待されるのである。「新音楽教育」の発刊趣旨による一文では、こういった日本音楽への見通しについては全くふれていない。ただ社会の実状に合った音楽を、ということを強調しているにすぎない。

実際、この頃の音楽教師の考えの中には、軍国主義が終って民主主義になったのを機に、新しい音楽教育をしようとは思っても、自国の伝統音楽を学校の音楽教育にとり入れようとする人は無かったと思われる。もしあってもそれはほんの少数であっただろう。

連合軍民間情報教育部のC・デーヴィズ氏の論文によれば、「今までは軍国調によって表現の自由を失っていたが、これからは音楽の政略的制圧から解放され、更新された活動を生み出すことが出来る。そして音楽的状况は貧困であっても、これこそ望みある徴候であり、従来よりもより強度な新らしい生命と新らしい色彩という刺激を必要としている。」とある。そして「アメリカやヨーロッパでは、クラシック音楽という音楽の貯蔵所を持っているが又、軽く手が叩かれる現代音楽の資源もある。」とも述べている。

軽く手が叩かれる現代音楽とは、当時はジャズなどであったが、このような音楽にも外国では正当に位置を与えようとしているところに意味があると思われる。「現代音楽が崇高なクラシック音楽に沿って位置を占めているヨーロッパ及びアメリカ」であり、そして「その両者の対照が諸時代に色彩を加えていき、音楽文化に新しい観念と技巧をそえていく。」と述べ、両者を同等に扱っている。

当時の日本の音楽教育関係者の中に、この様な柔軟な考えを持った者は、そう多くはなかったと思われる。むしろ音楽教育に携わる者よりも他の分野の人、つまり音楽には素人と言われる人の中に音楽に対して柔軟な考えの人が多くいたのではないと思われる。

又、C・デーヴィズ氏は、「日本において既に存在する確固たる基礎を持って、より大なる発展と、より偉大なる音楽成就是必然的である。」とも述べているが、「既に存在する確固たる基礎」とは、日本音楽のことを指しているものとは思われない。それは明治以来我国に導入されて来た西欧音楽のことを言っていると思われる。

霜田静志氏（当時井荻児童研究所長）の「音楽教育断想」の中の文によると、「自分が受けた音楽教育は、拍子感は全く無く、ただ節まわしをきれいに歌えばそれで良かったし、楽典なども実際学んでいる音楽とは何の関係もない、規則のための規則であって、丸暗気させるだけであった。そして、日本人はメロディーに於てすぐれたものを持ってはいるが、ハーモニは不得手であり、これにもっと力を入れないと文明国の音楽を解する仲間になれない。」と述べている。

霜田氏は音楽教育の専門家ではなく、児童心理学者であるが、氏の文から見られ

る通り、一般の人々の考えは、やはり文明国の音楽を解する仲間になる事に大きな意義を見いだしていたのだと思われる。

氏の文の中で、当時の女学校の先生の例が書かれているが、その音楽の先生は、生徒に歌を歌わせてその生徒が調子を外すとアハアハと大声で笑うので、横できいていて苦々しく思ったという。

素晴らしい音楽家であったとしても、このようなことでは音楽教師としては失格であり、相手に対する心理理解が欠如しているからだと言っている。

現在でも、そういう教師は音楽教師に限らず多くいるのではないか。子どもの失敗を、「皆さん笑ってやって下さい。」と皆の前で言ったばかりに、その子は登校拒否児になってしまった例を私は知っている。

この文から伺い知れるのは、当時の音楽教師が無意味に丸暗気をさせたり、リズム感拍子感がない教え方をしたりと、意欲はあっても、本当は音楽を教える自信も薄く、音楽教師の質も一般的には低かったのではないかと思えるふしがある。

これは音楽教師のみに言えることでなく、教師全体の資質の問題でもあっただろう。

亀井勝一郎氏（文芸評論家）の「音楽と児童教育」によれば、「子どもは西洋音楽に対して敏感に反応するが、大人はそれに対してまだギャップがある。大人は子ども向きということをすぐ考えるが、子どもは頭で理解出来なくても説明出来なくても、ある感動は受け取ると思われるので、やはり一流のものを与えるべきで、子ども用にこの程度でよかろうということで与えてはいけない。」と述べている。これは当時とすれば仲々実行する人も少なかった。特に幼児教育ではこういった考え方を実践する人は少なく、30年を経た現在でも少なくなったとは言え未だ「子どもは子ども向きのものを」といった考え方がまかり通っている場面にぶつかる時がある。

又、「私は子どもに対しては幼少の頃からすべて一流の芸術品を与えるべきだ」という意見を持っている。音楽ならばベートーベンをバッハをモーツァルトを。絵画ならばダ・ヴィンチを雪舟を」とも述べている。

当時の考え方としては当然であったかも知れないが、音楽の一流芸術品はベートーベンやバッハやモーツァルトに代表されていることに注目したい。C・デーヴィ

ズ氏はクラシックと、「軽く手を叩かれるもの」に同等の価値を与えていることに
対して、亀井氏は、日本にある伝統音楽である民謡などにも価値を認めていないの
ではないかとさえ思われる。そこまでは思わないとしても、日本の音楽がそこに上
って来ないことは淋しい。

現在では、クラシック音楽が好きです。などと言えば、まあめずらしいですね。
などと言われる事もある時代になっている。それだけ日本における音楽が多様化し
ている証拠であろう。

又現在では、外国で行なわれる国際コンクールには必ずと言って良い程日本人が
上位を占めているし、日本でも国際的なピアノコンクールが行なわれるようにな
っている。

30年という月日が、いかに日本の音楽を多様化させ、又文明国の仲間入りどころ
か、世界でも注目される日本人になっているのである。

次に「絵画ならばダ・ヴィンチを雪舟を」であるが、絵画では西洋も日本も当時
から一流芸術品として価値が認められ位置づけられていたということに、今改めて
思い到ったのである。絵画にはあって音楽にはそれがない。

なぜ日本の音楽は当時一流芸術品として浮んで来なかったのであろうか。

それは、日本の音楽に閉鎖的性格のものが多かったためであろうと思われる。家
元制度があり、家元より上手になれなかった。又それを望むとすれば別の流派を起
すしかなかったという状態から発達していった日本音楽には、普遍的なものが欠け
ていたと思われる。又もう1つには、西洋音楽が宗教と密接な関係を持っており、
日常生活に欠かせないものだったのに対して日本における仏教では、仏教音楽の
発達を伴わなかったことが致命的であったのではないだろうか。日常生活の中に
くい入るだけの宗教的音楽素地があったかなかったかの相違であろう。

しかし一見合理性に欠けるとと思われる日本人の持つ「静」と「動」の音楽に惹か
れ、その原点に回帰する若者が増えたことも前に書いた。それらの人々が作る曲が
外国で受け入れられ、多くの日本人が海外で活躍している。

三味線や琴なども5線譜で表わして弾けるような楽譜も出来ている。

日本人は多様な音楽を所有してはいても、日本の音楽を大切にしていける素地をいつも持つ事が、広い意味での日本民族の課題であり、又、それが当然の姿ではないかと思われる。

現在、文部省でも、日本音楽を少しずつ教科書に多くしていこうとする姿勢が、除々にではあるが認められて来ている。

今でこそ日本の伝統芸能及び伝統音楽の文化的価値は与えられても、それを学校教育にまで取り入れて来なければ、それが浸透したとは言えないのである。

次に亀井氏は述べている。「各家庭がピアノやヴァイオリンを子どもに習わせる習慣はまだ一部で、ぜいたくなもの、という偏見が強いが、20年、30年も先になればどんな家庭でもそれが当たり前になるだろう。」

言い得て然り、30年たった今、ピアノは小学生の女の子ならば大半が習っているのではないかと思われる程普及し、ピアノのある家庭も軒並みといった感すら受ける。

しかし、同じ習い事でも、お琴を習っていてもピアノを習っていなければ学校での音楽の授業には役立たないし評価されない。一口に音楽と言っても、西洋音楽と日本音楽の違いをはっきりと思い知らされるのは他でもない学校での音楽教育においてであり、日本音楽を受け入れない素地を作っているのも又そうだと思われる。

次に内山孝一氏（医学博士）の「私はこう思う」について述べてみる。

氏は医学博士で、生理学者の立場から音楽について述べている。

「今泉みね老女著『名ごりのゆめ』という本の中に、『一体不思議なものは三味線ですね。抑えるとチンと云い、はなしてテンと鳴る。それで言いたい事に合って行って人を笑わせたり泣かせたりする。一を打つとトーンと鳴るあのひびき、無量の思いがある。たった三本の絃の働きは大したものですね。』との文を見て、全くその通りである。しかし、それをきく耳がなければそれは単に音が鳴ったにすぎないものになってしまう。』という内容の文があった。

確かに音楽は全てそうであるが、きく耳を持たなければ何もその人に感動を起すことは出来ない。又、次の文には日本の音楽に対しての注目すべき考え方が書かれ

ている。

「きく耳を持つか持たぬかは、きく人の教養によって決まる。複雑なものが勝っているとも云えないし、簡単だから劣っているとも云えない。それはどこまでも生命の深いところに迫ってこれを如何に感動せしめて如何に生長させることが出来るか、にかかっている。これは音楽の自然である。西洋の音楽にはリズム、メロディー、ハーモニーが具っているが東洋の音楽にはハーモニーを欠くと云われ、その点でも劣っているように云われるが、それは音楽の理論の構成に關することであり、簡単なものが直ちに劣るとも云えないし、又原始的なもの必ずしもつまらないとも云えない。一音でも生命のこもったものが人を打つのである。」

氏は音楽の専門家ではないが、この様な素晴らしい考え方をしている人が音楽家や音楽教育者にいて、しかもそういう人が音楽界の指導者として多大な力のある人であつたら今の音楽教育は変っていたであらうと思われる。少なくとも、日本の伝統音楽をきいて思わず吹き出す、といった日本人は作らなかつたはずである。現在では確かにそういう日本人はいるのだから。

次に矢野西雄氏（当時参議院議員）の「真日本と音楽行政」について考察してみる。大要は次の通りである。

「形式と内容が単に変化した新しさはむしろ真実にあるべき文化価値に相反したり矛盾することさえある。この意味で流行歌を新しがり屋がちやほやし大騒ぎをしても、これはかえって悲しむべきことである。音楽教育発展のためには教育文化予算の確保が大切である。しかし、参議院の文教常任委員としての私にこうしたことで訴えて来た人はだれもない。請願、陳情の類にも殆んど見ることはない。」

この文から見ると、いかにも政治家らしいと思われる。彼の頭の中にはやはり良い音楽と悪い音楽の区別があつた。C・デーヴィズ氏が「軽く手を叩かれるもの」にも価値を与えたのに対して、こちらでは「新しがり屋がちやほやして大騒ぎをすることは悲しむべきこと」としている。当時の一般の多くの人は同じような考え方をしていたのではないだろうか。本音と建前の使い分けが無意識に出ていると思われる。

次に「教育予算の確保が大切」なのは30年前も現在も変りがなく、文化行政、教育行政には多くの人々はまだ不足の念を感じている。

注目すべきは「こうしたことで訴えて来た人はだれもない……」の箇所である。それは、芸術関係の人々は行政については案外無関心であることを言っているのである。芸術関係の人々の特性としてあげられることは、芸術と自分との対話の中にもり過ぎ、その殻からぬけ出せぬことであろう。又、教師が行政に口だしをするなんて、という意識もあったであろう。そして行政の方でも、声の無い所には薄く、声の大きい所には厚くなっていくのは自然の成り行きだったと思われる。ここでは、芸術関係及び音楽教師に、そういう運動を起こせと警告しているのである。

以上四氏の文章から感じることは、さあこれから何かするんだという熱気があることである。意欲にあふれているものばかりである。現在の様に多様な音楽が、この様な形で日本全土を覆うとは、この時各氏は考えもしなかったのではなかろうか。

この時代は物も足りず、十分な音楽教育をするための人も足りなかったのではあるが、未来の理想に向っての意欲に満ち、活気のある時代であったと思われる。

しかし明治以来の西洋音楽の導入の時期での片手落ちが尾を引き、長い間音楽関係者及び音楽教師を苦しめていることも事実であった。

そして現在、昭和23年頃の1つの方向に向いていたと思われる活気という形ではなく、各人が好みに合せた音楽を選択出来る豊かさに変った今、音楽が多様化すればする程その音楽教育は混沌として来ているのも事実である。諸外国からの各種のメソッドやシステムの導入などによって様々な考え方が出て来ている。

そして今、音楽教育の本質は何なのか、多様化する音楽をどう受けとめ、子供達が、その音楽が生きるささえになる、といったものを選択させる素地を作るためにはどうしたら良いのかの点が重要になってくるとと思われる。どの様な方法をとったとしても、その点にアプローチ出来れば良いのであるが。

世の中が複雑であればある程問題は多くなる。

ここでもう一度内山孝一氏の文を心にとめたい。「複雑なものが勝っているとも云えないし、簡単なものや原始的なものが直ちに劣っているとも云えない。きく耳

を持つか持たぬかは、きく人の教養によって決まる。一音でも生命のこもったものが人を打つのである。」

原点に返って音楽教育を再考してみるには大変良い言葉である。

しかるに現今、音の刺激が豊富にありすぎて人々の音や音楽に対する感覚が鈍くなって来ているふしがある。たとえ音楽が鳴っていようとも心理的にはきこえないし又きかない人間を作り出している。

元来、日本人は音に対して不感症な人種だったのだろうか。決してそうではなく、たとえ「無」や「静」にもそこに意味を見い出し、目に見えない音の世界を作り上げていたのではないか。

環境を無視した経済高度成長下で浮かっていたつけが今まわって来ている。

音公害などの環境整備について少しずつでもよいから前向きの姿勢をとっていかねばならないのである。

参 考 文 献

『新音楽教育』第一巻 昭和23年5月発行 白眉社

『音楽リズム』 小林美実編著 川島書店

『新明解国語辞典』 金田一京助編著 三省堂

(上田女子短期大学講師)